『比較日本文化学研究』第 9 号（2016）

芥川文学研究に於ける西洋古典モチーフの必要性についての一考察

ダマソ・フェレイロ

Reflections on the influence of the "Western Classical Tradition" motif on Akutagawa's literature

Abstract: Akutagawa Ryunosuke is a well-known Japanese writer who played a prominent role in 20th-century Japanese literature. The influence of French literature, Christianity, and classical Japanese literature on his work has been studied extensively in previous research, but the influence of the Western classical tradition has never been studied before. This study aims to clarify why this tradition should be taken into account when analyzing Akutagawa's literature, taking into account three different factors: the presence of the Western classical tradition in European history as a whole; the reception of the Western classical tradition in Japan from the Meiji period; and the close relationship between that tradition and the most quoted Western writers in Akutagawa's works.
Keywords: Akutagawa, Classical Tradition, West, Influence

1. 始めに

日本の近代文学の研究は、現在のグローバル社会のおかげで世界中に急速に普及し、著しい進歩を遂げている。日本の国境を超越し、アメリカ合州国や、南アフリカ、ドイツ、スペインなど、研究者の数が増加すると共に、研究テーマの幅も段々広くなっていく傾向を見ることも出来る。このように、ここ十五年の間に日本の近代作家の作品の翻訳が様々な言葉で急増し、「夏目漱石」や「太宰治」、「森鷗外」、「芥川龍之介」などが日本外、世界中の本屋の本棚で並んでおり、どこの国のどういう読者でも手ごろな価格で入手できるようになった。つまり、大まかに言えば、最近は日本の近代文学ブームがおこり、世界文学の重要な一部分となったと言っても過言ではない。

日本文学への関心が高まるに連れ、その一方で、比較文学研究において日

本文学と比較される対象も世界文学に広がっているのである。イヴ・シュヴレルの言葉を思い起こしてみれば、次のようである。

「比較文学は類似性、同族性、影響関係を研究することによって、文学を認知科学の他の分野に近づけようとし、また、事実と文学作品―この場合事実と文学作品が、たとえルーツが同じであっても、複数の言語・複数の文化に属してさえいれば、それらの時間的、空間的差異は問わない―とを相互に結び付けて、その理解と記述に役立てようとする体系的方法である（略）すなわち、それは国際間精神的つながり、いくつかの違った文学に属する、〔作家や作品の間に〕存在した事実の相互関係を研究するものである。」[1]

むろんこの比較文学の定義には困難な箇所が存するかも知れないが、今日では比較文学は文学史の中で最も盛んな分野だと考えられる。比較文学の根本には、重要な概念が二つあり、その一つは「国民」、もう一つは「国際」と言う概念である。換言すれば、研究によって、身近で平俗な世界の要素を一つか二つを選択し、見知らぬ外の世界にある要素と対立させることである。このような定義に従う例をいくつか挙げられると思うが、芥川文学の分野に絞ってみれば、芥川文学とフランス文学との関係や、芥川文学における中国のイメージなど、日本外の要素と比較する芥川文学についての研究論文が数多くあり、この現象は日本文学の普遍傾向に包括されていると言っても良かろう。しかし、現在まであまりふられたことのない場所的、時間的にとてつもない距離で離れている芥川と西洋古典との関係という本論のテーマまで研究する意義があるのかという問いも生じうるかもしれない。西洋古典は、芥川文学上での重要な位置づけを占めるモチーフの一つであり、四つの論拠が挙げられるであろう。第一に、西洋古典は、西洋文明のエトスの欠かすことの出来ない一部分として、西洋文明と接触するだけで無意識的に吸収される要素である。第二に、西洋古典は、明治維新からの状況を分析した上での結果である。第三に、『芥川龍之介全集総索引』の「総索引」、「人名索引」と「引用作品索引」の分析した上での結果である。最後に、以上のことを踏まえながら、考察したいと思う。

2. 西洋文明のエトスとしての古典

さて、西洋文明のエトスとはなにか。西洋文明はどのような要素から成立しているのか。西洋文明を定義しようと思えば、何か不可欠な条件があるの

か。ヨーロッパ的な本質と呼ばれるものがあるのか。この件について、研究者によって主張が異なるため、ここでは一般論を紹介しようと思う。そうすれば、次第にヨーロッパのアイデンティティ、つまり、西洋文明のエトスということが判明されていくはずである。

まず、ヨーロッパとは何かという問題に直面する前に、西洋文明に関して不用な情報を選別した上で、排除するべきであろう。地理的な観点からすれば、アジア大陸の岬にすぎないヨーロッパは、自然的な境のある地方ではあるまい[2]。ヨーロッパの範囲が限定されていなければ、そのアイデンティティは民族にも捜し求めないはずである。なぜなら、歴史を遡っていくほど、ヨーロッパの外から様々な民族が入っては出ていっており、この人種混合がヨーロッパの特徴の一つだと言っても過言ではないからである。地理的、人口統計学的な論点を除けば、ヨーロッパのエトスは科学的な思想や、民主主義、EU などに存すると断言する研究者が少なからずいる[3]。もしかすると、この主張は、地理的な主張と同じように弱いのではないかということを読み取ることができる。ヨーロッパというものは、EU や民主主義が登場する以前に存在したものではないか。加えて、このような主張は冷戦時代の考え方の結果ではないか。

ヨーロッパの本質の中には、時間が立つにつれ、不変せず固定されたままで存在しているものがあるのか。実際には幾つかあるが、それらを大まかにまとめてみると、約七つの要素を含んだ一般論[4]がある。その七つは「「自然」の概念形成」、「人間の把握」、「理性」、「政治社会の成立」、「民主主義」、「人間の権力」と「自己批判」である。

芥川が人生を送っていた 20 世紀前半まで、西洋文明の根拠はアテネ、ローマ、エルサレムの「三つの歴史的な根拠」[5]を基礎に定着していることは否めない。むろん、この三つの根拠は、西洋文明に明らかな足跡を残したにせよ、西洋文明の全てを単純化させることはできないだろう。インドや北欧の影響、前ローマ時代の民族の影響、ケルト文化の影響、イスラム文化の影響、ルネサンスの影響、人間中心主義の影響、啓蒙主義の影響、マルクス主義の影響、フロイト学説の影響、アメリカ合衆国との愛憎関係、キリスト教の分裂、殖民主義、科学の著しい進歩などの様々な要因がもたらしている影響の重要性が勘案されるべきであろうが、芥川が愛読した F. シュミット（ドイツ、1816–1890）や W. ヴント（ドイツ、1832–1920）、A. フランス（フランス、1844–

1924）P. ルイス（フランス、1870-1925）等は、19 世紀末の最も際立った古典の研究者であり、古典の最新知識を自分の作品に活かした作者である。彼らは、「西洋古典」、簡潔に言うと、アテネの「Logos（理性）」、ローマの「Ius（法律）」とエルサレムの「Caritas（慈悲）」は欠かすことは出来ない西洋文明の三つの基礎である、という見方をしていた。『神々の微笑』、『MENSURA ZOILI』、『きりしとほろ上人伝』、『西方の人』、『誘惑』、『文芸的な、あまり文芸的な』等という芥川の作品を読めば、例外なく、芥川の「紅毛人」文明の把握の仕方とも一致することは明白である。

当然ながら、この点に関し、現代の議論はよほど進んでおり、シェーラーとブラケの「西洋文明のどこかの魂の隅にあるもの、それは受動的な物質と能動的な物質[6]」の学説が発表された。文学上の立場からすれば、西洋古典の貢献や継承の程度、様々な側面についての議論と取り組んでいる、伝統的な前提が受け取れない H. ブルームや、J. L. ボルヘス、クッツエらという文学者は少なからず、増加しつつある。

しかし、上記の西洋文明の根拠を見てから、もう一度、芥川文学で見ることが出来る、西洋文明と接触するだけで無意識的に吸収される要素、というテーマに戻りたいと思う。そのため、再びブラケという名前を取り上げることが必要となる。ブラケにとって「西洋文明のどこかの魂の隅にあるもの、それは受動的な物質と能動的な物質」[7]、つまり、西洋文明の魂に存するのは受動的な物質と能動的な物質の間の葛藤である。古典、そのものへの誘引と拒否、アトラクションとリフューズは、西洋史を動かすエンジンとしてみれば良い。極端に聞こえるこの断言には十分な根拠があるので、例を紹介しながら分析していきたいと思う。このような説がセッティスにも取り上げられ[8]、その由来はなんと古代ギリシャの紀元前何世紀まで遡ることが出来るのである。つまり、何世紀にも渡り、変わることのない西洋文明の特長だと言っても良かろう。西洋の真髄に存するこの「葛藤」の概念が初めて登場したのは、恐らく古代ギリシャの神話に出てくる、アフロディーテ（愛）とアレース（憎、戦争）という擬人化された神々であり、二人は密かに愛人関係であった。世界の様々な現象はこの二人の神の働き、つまり「愛」と「憎」で説明されていたことが珍しくなかった。時間が経つにつれ、自然哲学時代へ入っていくと、重要な人物が現れる。それは、紀元前 490 年頃から紀元前 430 年頃、つまり紀元前 5 世紀に存在した古代ギリシア自然哲学者の一人であり、

ちょうど自死を迎える前に芥川が手紙に引用した[9]、エンペドクレスであった。彼の考えによると、世界の根底にある四つの物質、彼の言葉を借りれば、リゾーマタ（ριζώματα）、は「愛（Φιλότης）」と「憎（Νεῖκος）」の争いにより集合離散が行われ、世界を成立すると共に、その世界を変化させていくものである[10]。

紀元前6世紀から紀元前4世紀にかけての期間は、フォアゾクラティカー(Vorsokratiker)[11] ソクラテス以前の哲学者の中で、エンペドクレスは中心人物として最も際立った人物でもあった。彼の思想において、とりわけ賞賛された点は二つあり、その一つは理性的思想と神秘的思想の結合、もう一つは、彼以前の哲学者の世界の根底の火、水、土、空気という四つの物質を取り上げ、自分の世界の把握に適用しようとすることであった。また、多数の神話で表れるように、ピタゴラスと並べオルペウス教との思想にも結びつけることも、多くの研究者にも指摘されている、絶えもなく争い続く「愛」と「憎」は崇拝するべきもの、という考えもエンペドクレスの思想の重要な一部分でもある[12]。

「葛藤」という概念はエンペドクレスに体系化されてから、後の来るプラトンや、ギリシャ哲学の一時代となるヘレニズム哲学のエピクロス派やストア派にも取り上げられ、各派の哲学説に合体されたのである。「葛藤」というものが西洋文明の核心的な要素になり、少なくとも20世紀まで不変のまま残っていたのは、古代ギリシャの哲学のおかげでなく、基督教にも受け入れられたからである。

しかし、なぜ西洋文明における「葛藤」がそこまで重要なものなのか、という設問も生じるかもしれない。エンペドクレスの名付けた「Φιλότης（愛）」と「Νεῖκος（憎）」、即ち、「誘引」と「拒否」というのはローマ帝国が滅亡してから、この二つの概念が古典への態度に当て嵌めることが出来るからである。現時点で再びセッティスの言葉を引用したいと思う。“El hombre muere y no renace, pero lo “clásico” muere para renacer, cada vez igual a sí mismo y cada vez diferente. Este modelo cíclico, esta obsesión recurrente por un “clasicismo” siempre dado por muerto y siempre renacido atraviesa toda la historia cultural europea.[13]” つまり、人間と違い、「古典」は蘇るために消滅しなければならないもので、「西洋古典」にはこのような特徴が存在するからこそ、西洋文明史を通じ、どの時代でも「古典」を見かけることが出来るので

ある。このような周期的なモデルは「Ad infinitum」、永久に繰り返し、東西に分割統治されて以降のローマ帝国の東側でも西側でも見ることが出来る現象、である。「西洋古典」というテーマに取り組む際に、「連続」と「復活」という概念が中核となり、この二つの概念に基づいた、「西洋文明の連続理論」と「西洋文明の不連続理論」、二つの理論が 1948 年まで共存したのである[14]。この二つの理論を統合したのはドイツの古典研究者、E. ホーワルドで、研究書は「*Die Kultur der Antike*」（1948 年）である[15]。彼の説によれば、全ヨーロッパの文化的記憶に存するものは何かと問うと、それは古典とは違い、むしろ古典の周期的な引き返しだと指摘されている。このような周期的な過程は「死」と「蘇り」を伴い、前の説明と結び付けてみれば、「死」＝自分自身の過去の重要性の「拒絶」、「蘇り」＝自分自身の過去の重要性の「受け取り」のようになる。しかし、ホーワルドの言葉を借りれば、全ヨーロッパの文化的記憶に存するものはこの過程だけでなく、もう一つの見逃すことが出来ない西洋文明の特徴がある。それは身体的にとらえる古典時代からの残るもの、つまり、古典の遺跡である[16]。この遺跡を鑑賞する人、誰にでも、「死」と「生存」、せめて二つのアイデアは浮かんでくるであろうし、いくら教養のない人でも、何世紀にも渡り建ち続けている先人の実力の証拠にもなっている遺跡を見ることで、今と昔は違うものだといっても、どうにか繋がっているものだと分かるだろう。換言すれば、西洋人は遺跡に囲まれているからこそ、自分の崩壊した過去から逃げられないということである。

もう一度セッティスの言葉によれば、「遺跡は「不在」と「存在」、両方の意味も含んでいるものであり、目に見えないものと目に見えるもの交差だと言ってもよかろう[17]」とのことである。しかし、「人間と遺跡」の関係について、20 世紀だけのテーマではなく、19 世紀の冒頭にも、政治家で、作家としても知られるシャトーブリアンにも論じられたのである。自然や文学、社会など世界の様々な面から神の栄光を讃美した彼に『キリスト教精髄』（1802 年）という傑作に「全ての人間には潜んでいる遺跡への関心がある[18]」と記している。それはなぜかと言えば、遺跡を鑑賞するだけで、我々人間としての状態とアレクサンドロス大王やローマ帝国などの没落した大帝国との比較ができるからである。それはともあれ、21 世紀に戻れば、この問題についての最新の主張は、セッティス氏の研究で見かけることが出来る。なぜ西洋文明に限り、この死・蘇りの過程が永久に連続するのか、なぜ西洋文明に限り、

遺跡の重要性が世紀を渡り保っているのかという生じる質問にはセッティスは次のような説を紹介する。

以上の二つの問いの原因はある出来事のもたらした文化記憶的なトラウマに存し、その出来事はローマ帝国の滅亡である[19]。言うまでもなく、この滅亡は伝説に取り上げられているように一瞬のことでもなく、原因が幾つも数えられ、帝国の分裂やキリスト教の浸透、奴隷の混乱など、長い衰退過程の結末だといっても良かろうが、西洋文明の集団記憶に記録されているのは北欧の民族、即ち、野蛮人の侵入のみである[20]。この野蛮人は軍隊的にはローマ帝国を破られたにせよ、実際は文化的に旧帝国の市民に拒否され、古代ギリシャ・ローマの文化が憧れの理想化されたものになった。セッティスが指摘するように、「ローマ帝国の滅亡した際のような猛烈な結末は、インドや、中国、日本など、他の偉大文明で見ることが出来ないものである[21]」、つまり、今と昔のトラウマ的な切断が起こったため、文化的アイデンティティの問題も絡んでしまい、故郷のなかった西洋文明は幼少期から古典を通じ、「ヨーロッパ」全体を統一しようとした。西洋文明の歴史を振り返れば、中世時代から20世紀にかけエンペドクレスの描いた古典への「愛」と「憎」の争い、即ち、以前記されているように、西洋文明の核心にある「葛藤」が時代と芸術の分野を問わず、連続するものである。8世紀に見られる古典復興カロリング朝ルネサンスから、20世紀に見られる最先端に立つ芸術家のアバンギャルドまで、「古典」は「基督教」など、他と比較すれば、絶え間なく扱われている唯一のモチーフである。

今まで示してきたように、西洋文明における古典という要素は、たとえ人工的に蘇らせるものであっても、最終的に西洋文明の文化的アイデンティティの基礎となっているので、西洋芸術に関わる研究を行う場合、「古典」は触れるべき主題なのである。西洋芸術の一部分である西洋文学に関心を寄せた森鷗外や、夏目漱石、正宗白鳥など、芥川と同様に西洋古典の影響から逃れることはできず、当然ながら、無意識的であっても、ある程度の影響を受けていたことは明白である。言い換えれば、西洋文明における古典は真似するべきモデルにせよ、逆転するべきモデルにせよ、古典の捉え方に関わらず、長期間にわたり基準となっている要素だと意識する必要性がある。再びセッティス氏によれば、「西洋文明は古典から解放出来ない（略）せめて20世紀まで[22]」ということなので、20世紀以前の研究に考慮に入れなければならな

いモチーフである。

3. 明治維新後の西洋古典の状況[23]

上記で西洋古典は20世紀に入ってからでも、西洋文明の不可分の一面であることを見てきたが、その後、二つの極めて重要な作業が残っている。一つは芥川を取り囲んでいた明治期からの西洋古典の状況を調べることである。この作業は、芥川の命が流れた明治期から昭和期にかけての背景研究である。

むろん芥川の英語力が優れていたため、『芥川龍之介全集総索引』を参照すれば、西洋古典に関する愛読書の中で、日本語訳を余り見かけることが出来ないが、お分かりの様に既に十五・六歳から芥川がエンペドクレスの知識を持っていた。若い頃に外国語から知識を得ることは並大抵のことではないだろうし、まして、彼自身がある程度の情報力や注意力をもってしても習得することは出来なかったであろう西洋古典の知識が、明治維新以降スタートした日本語による西洋古典の研究開発から良い刺激を受けたことは確実だと考えられる。

さて、1868年からの西洋古典の日本への移入はどのような状況だったのか。資料1を参照すれば、明治期から発する西洋古典への関心は、段々高まっていき、その傾向は昭和期にブームとなるということが言えるであろう。しかし、たとえ明治期から西洋古典の移入される作品や知識が増加したとはいえ、勘定に入れるべきもう一つのこともある。それは、明治期はこの傾向の出発点として見做されているが、実は厳密にいえば、そうであると言えないということであろう。明治以前にも、西洋古典についての歴史、哲学、文学といった総合知識のまとめ書が出版されており、詳細な紹介が余り見れない一方で、プラトンやホメーロス、アイスキュロス、ヘーロドトス、エウリーピデスといった名は記載されている。それ以前でも、16世紀から公にされていた唯一人の作家、モラル内容に溢れる寓話を執筆した、アイソーポスも取り上げられている。

明治時代の西洋古典を語るうえで必須の作品がある。それは、渉江保の『希臘羅馬文学史』という初歩的な解説書である。『希臘羅馬文学史』というものは1893年に公表され、様々な古典知人の重訳に基づき、一般的な作品として認知されるきっかけとなった。しかし、その前にも1877年にブームの幕開けとなった作品、グッドリッチの世界史の一般的な知識を紹介した日本語訳書

籍『巴来万国史』(「*Parley's Common School History of the World*」) が存在した。また、明治期を渡り大正期、昭和期、現在までにかけ、沢山の出版を生み出し続けてきた神話分野の中でも特筆すべき書物がある。それは、ギリシャ神話研究の出発点となった、久米邦武の 1891 年発表『神話は祭天の古俗』である。この作品は新たな分野を切り開き、そのあとを受け継いだのは、日本神話とギリシャ神話とを比較した、高山樗牛、姉崎嘲風と高木敏雄の『比較神話学』である。19 世紀に発見されたインド・ヨーロッパ語のきっかけをつかんだ比較研究の成果が日本の研究者にも活かされ、神道と古代ギリシャの宗教との比較が盛んに勉強されるテーマになり、『比較神話学』というものはその初歩の初歩である。本研究のテーマとなる作者、芥川の作品中でも、『神神の微笑』という作品にもこのテーマが触れられ、神道の神々と古代ギリシャの神々の間の相違点よりも、類似点や一致している点が強調されている作品である。パアドレ・オルガンティノと老人の神の対話の中では次の箇所が見ることが出来る。

「(オルガンティノ)「なるほど造り変える力ですか？しかしそれはお前さんたちに、限った事ではないでしょう。どこの国でも、—たとえば希臘の神々と言われた、あの国にいる魔法でも—」

(老人)「大いなるパンは死にました。いや、パンはいつかはまたよみ返るかもしれません。しかし、我々はこの通り、未だに生きているのです」

オルガンティノは珍しそうに、老人の顔へ横眼を使った。

(オルガンティノ)「お前さんはパンを知っているのですか」

(老人)「何、西国の大名の子たちが、西洋から持って帰ったと云う、横文字の本にあったのです。—それも今の話ですが、たといこの造り返る力が、我々だけに限らないでも、やはり油断はなりませんよ。いや、むしろ、それだけに、御気をつけなさいと云いたいのです。我々は古い神ですからね。あの希臘の神々のように、世界の夜明けを見た神ですからね。」

(略)

(老人)「私はつい四五日前、西国の海辺に上陸した、希臘の船乗りに遇いました。その男は神ではありません。ただの人間に過ぎないのです。私はその船乗と、月夜の岩の上に坐りながら、いろいろの話を聞いてきました。目一つの神につかまった話だの、人を豕にする女神の話だの、声の美しい人魚の話だの、—あなたはその男の名を知っていますか？その男は私に遇った時から、こ

の国の土人に変わりました。今では百合若と名乗っているそうです。」[24]

芥川のテキストによれば、彼にとって、世界の神々は二つの部類に分けられ、一つは古い神々、つまり、大昔からオデュッセウスの人物で繋がっている原始的な造り返る力の持っている神々であり、もう一つは紅毛人が来日した時に持ってきた世界の夜明けが分からぬ傲慢な神、つまり基督教の神である。これに従い、古代ギリシャの神々と日本の神道の神々も同様の神々の分類に入り、どちらも基督教に対立するのである。

さて、明治維新からの西洋古典の神話の分析を続ければ、昭和期に歩み入ってから、古代ギリシャ・ローマのブームに従いギリシャ神話、特に児童向けの書物が盛んになり、松元竹二の『ギリシャ・ローマ神話伝説集』(1933年)や呉茂一の『ギリシャ神話』(1956年)、吉田敏彦の『ギリシャ神話と日本神話』(1974年)などが出版される。このような刊行のおかげで、専門家だけでなく、一般的な読者の間でも西洋古典の知識が広がっていき、20世紀中に見ることが出来る西洋古典の普遍にとても役に立ったのである。すでに存在しない、本にしか残らない他者の伝統や伝説、価値観、道徳などを身について行き、西洋古典が普遍できるようになった。

明治期以降の西洋古典の移入の中では、大昔から伝わってきたテキストの翻訳を分析するというのも重要な問題である。翻訳に関する明治期と大正期の主な特徴といえば、古代ギリシャ語とラテン語の心得が不足しており、全ての翻訳は九割がた英語からの翻訳、即ち重訳であった。昭和期からは原典訳が始まり、ますます増加していくものである。その事情を具体的にみてみれば、次の通りである。明治以前でも、優先的に公刊されていた作家は、既に記述したように、アイソーポスであった。明治期に入ってから、明治初期の混乱期に普遍化される渡辺温の『通俗伊蘇普物語』(1873年)という書物が出版された。それ以降、金田鬼一『寓話文学』(1933年)や小田貴一『寓話文学』(1937年)などの本格的な原典訳が、多数、公にされ、アイソーポスへの好意は現在まで継続されているのである。明治期の言及にふさわしい例として、ソポクレース、テオクリトス、ホラーティウス、アナクレオーン、アープレーユスの重訳が訳出されており、大正期に入ると、アイスキュロス、アリストパネース、エウリーピデース、アープレーユス、セネカの重訳も追加される。翻訳された作家の名に十分に気を配ると、考慮すべきことが一つある。たとえ、西洋の古典文学は約千年の歴史があっても、哲学でも、政治

でも、歴史でもなく、日本人に好まれている文学分野は、悲喜劇（ソポクレース、アイスキュロス、アリストパネース、エウリーピデース、セネカ）と、抒情詩（テオクリトス、ホラーティウス、アナクレオーン）である。

ギリシャ演劇の分野で、出発点とみなされている作品は、坪内逍遥の『希臘古代の演劇』（1907 年）というもので、大正期での代表的な研究書を取り上げるとすると、新関良三の『希臘悲劇論』I（1925 年）であろう。それ以来、本質論が盛んになる。また、悲劇に関して言及すべき興味深い現象のもう一つは、明治期の 30 年代から開始された、ギリシャの「悲劇」と日本の「能」との関係についての研究である。既出の神話比較研究で指摘したように、始まったのは明治期であるのに、結実するのは昭和期である。明治期に、このテーマを中心に研究した作者は、芳賀矢一で、研究著書は『希臘悲劇と我邦の能楽』（1904 年）である。また、大正期に入ってから、藤代素人の『能楽と洋劇』（1914 年）という研究書も、公にされた。

詩の中ではサブジャンルが幾つもあり、明治期の研究者の注目を浴びたのは、抒情詩と叙事詩である。抒情詩に関しては、不思議な出来事を見ることができる。それは、最も早く紹介された作家は、浪漫主義者の間で人気者であったサッポーではなく、西洋古典文学史の中では大して重要な役割りを果たしていないアナクレオンだったのである。紹介者は木村鷹太郎で、著書は『快楽詩人アナクレオン』（1902 年）である。サッポーの研究は、大正期まで目にすることはできず、サッポーが紹介された後、残りの古代ギリシャ抒情詩人が、昭和戦前と昭和戦後の頃に紹介されたのである。また、詩のもう一つのサブジャンル、叙事詩の代表的な作家と言えば、ホメーロスに相違ないのである。彼の初登場は、鳥山啓の『西洋ホメル詩学鼻祖』（1873 年）という作品中で、次に、石坂洋次郎の『オデッセイ物語』（1893 年）や正宗白鳥の『イリアッド物語』（1903 年）などである。大正期に入ると、生田長江の『イリアッド』（1914 年）という翻訳にも、ホメーロスは登場する。こうして、ホメーロスや、悲喜劇者、抒情詩の作家、古代ギリシャの様々な作家が、西洋の境を超え、世界文学全集、世界思想全集、つまり、「世界の古典」という類に収められるようになったのである。

最後に、もう一点検討すべき事象がある。西洋古典の研究を行っていない作家、言い換えれば、文芸的な作家における古代ギリシャ・古代ローマの文人の採用の仕方についてである。明治期には、西洋の文化や思想などが焦点

となり、文明開化の推進と共に、文学界にも圧倒的な影響を与えた。西洋文明の中で、国を問わず、統一化する要素と言えば、間違いなく西洋古典と西洋古典に結び合わせられる西洋の美徳であり、明治維新後の日本だけでなく、インドやアフリカ等様々な国、即ち、ヨーロッパの旧植民地でも西洋古典が注目を浴び、自国の伝統に段々と取り入れた国が少なくはない[25]。この過程は、19 世紀末から始まり、結実期は 20 世紀後半である。現在の最も優れている古典主義の研究者の一人、セッティスによれば、この過程の出発点となったきっかけは、ナショナル・アイデンティティを溶解させる殖民地運動の働きで、その上、西洋文明国自身が、時間的に現代文明と遠すぎた西洋古典を分解してきたおかげで、西洋諸国ではない国々で、西洋古典が受け入れられるようになったのである[26]。西洋古典の一般化や普遍化などは、現在のグローバル世界でもみられる現象であり、前述の西洋古典の分解が、至極自然に西洋以外の国々に受け入れられてきた。この様に、世界の多文化との接触のおかげで、西洋古典が強化すると共に、生きたものとして変化していくのである。たとえば、西洋古典の発祥地から、距離がかなり離れているハリウッドでも、映画作りにおいて西洋古典にモチーフが度々再現されており、映画作品として世界各地に届き、自然に認識されている。2007 年に公開された、ペルシア戦争のテルモピュライの戦いを描いた映画、紀元前 5 世紀のギリシャを舞台とした『300〈スリーハンドレッド〉』や、2000 年に公開された、ローマ軍将軍の紛争の話を描いた映画、帝政ローマ時代中期を舞台とした『グラディエーター』[27] などは世界的大ヒットになり、映画史上にその名を刻んだのである。

明治維新後と比較すれば、現在の西洋古典の状況は相当異なっており、当時の西洋古典は普遍的な過程が始まったばかりであった為、用いられた西洋古典の言及やモチーフなどは、教養度の高いエリート向けのものだったと言っても良かろう。それにも関わらず、重要なのは、古代ギリシャ・ローマの様々な文人が引用されるということであり、このような場合は、少なからず、明治期の書籍で頻繁に見ることが出来るのである。さて、西洋古典の世界に所属する文人の採用はどのようなものなのか。1883 年には、政治学者・文芸批評家である高田早苗の『維氏美学』という著作が発表され、西洋哲学史の入門書の形でプラトンやアリストテレース、ピタゴラス、ホメーロス、ヴィルギリウスなどの名が記されている。数年後、1886 年にも、同著者の『当世

書生気質の批評』、別作品でもう一度ホメーロスとヴィルギリウスの名が採用されていることがはっきりと分かる。このようなモチーフを扱っているもう一人の文芸批評家は、大西祝である。彼は1888年に、『批評論』という作品で、古代ギリシャ・ローマの様々な文人を取り上げ、とりわけ哲学者に重要な役割を与えた。さらに、明治後期から昭和初期にかけ、小説家・評論家として活躍していた後藤宙外と、新宿中村屋を起こした、実業家・作家として活躍していた相馬黒光の共著作中で、西洋古典と結びつける更なる要素が現れる。肉体に惹かれる愛よりも、精神に惹かれる愛の方が優れている、即ち、プラトニック・ラブという概念が登場する。指摘するまでもなく、「プラトニック・ラブ」の「プラトニック」というのは「プラトン的」という意味で、本来はアイデアの世界への愛を指している意味である。最後に、資料1を見てみると、作中で古代ギリシャ・ローマ文人を採用する作家のリストもあり、その中で、国木田独歩や森鷗外、高山樗牛などの日本近代文学の多くのビッグネームも記されている。大正期に入ると、前期よりも古代ギリシャ・ローマの世界に関する知識が深まっていき、西洋古典のモチーフを取り上げる作家の中で、芥川龍之介以外に際立った者は、倉田百三であろう。広島県出身で、大正・昭和初期に活躍した劇作家、評論家である彼は、『希臘主義と基督教主義との調和の道』(1925年)という作品でこの二つの主義のバランスの重要性を強調し、そのバランスこそが求めるべきことであると論じている。

ここまで分析してきたように、明時維新後の西洋古典の移入状況、いわば、芥川龍之介を取り囲んだ状況は、必ずしも「ブーム」として定義出来ないかもしれないが、西洋文明の切り離せない一部分として、古代ギリシャ・ローマの研究が積極的に取り組まれていたのは否めないことである。明治期に急激に高まった西洋古典への関心が、資料1で読めるように、結実期は昭和戦前と戦後に限られている。それ以後、この関心はゆっくり衰弱し、古代ギリシャ・ローマの文学は、単なる世界文学の纏めにおさめらる様になった。

4. 芥川の作品に於ける西洋作家からの西洋古典の影響

上述した様に、なぜ芥川龍之介の研究界では西洋古典というモチーフが検討すべきものなのか、という問いには、欠かすことの出来ない三つの理由があると述べたが、次に紹介するのは、芥川自身の洋書文庫の分析に基づいた、第三番目の理由である。この分析を行うため、『芥川龍之介全集総索引』[28]の

「総索引」、「人名索引」、「引用作品索引」と『芥川龍之介文庫目録』[29]から得た情報を基に、図表（資料2）を作成した。図表で表示されるのは、国籍別に並べた作者のアルファベット名と、その作者の西洋古典の関連著作品、また、芥川作品中でのその作者の引用頻度と、芥川がその作者を引用する際に使用する名称である。

芥川龍之介の洋書文庫の内容は次のようである。図書の中での洋書は638点809冊で、318名の著者のものがある[30]。所蔵の多い順に列挙すると、A. フランス、G. B. ショー、S. バトラー、G. ダンヌンツオ、T. ゴーティエ、C. A. サント・ブーヴ C. ボードレール、L. ダンセイニなどの著者が入っている。言うまでもなく、図表で登場する著者全員を本論で詳細に分析する余地がないため、芥川の引用頻度を基準とし、選択した著者の西洋古典との関わりを簡潔に紹介することにした。

4.1. イタリア

4.1.1. G. ダンヌンツィオ（1863年3月12日－1938年3月1日）

作家、詩人、劇作家として活躍していた20世紀のイタリアを代表する人物である。デカダン主義の思想に、西洋古典の様々なモチーフを追加することで、作品の核となる新しい詩的言語を作成した。彼の誇張した表現の中には、神話や古典文学の影響が浮かんでおり、自分が古代ローマの哀歌の後継者であると宣言したのである[31]。

4.1.2. ダンテ・アリギエーリ（1265年－1321年9月14日）

ダンテと西洋古典との関係についてグラフトン、モスト、セッティスにより次のようである。

“His extensive debts to and complex engagement with the classical world are emblematically captured in Virgil’s Unexpected role in the Divine Comedy as guide through the first two realms, Hell and Purgatory, of the Christian afterlife. His choice of the Roman poet highlights the strength of the bonds that Dante believed united pagan antiquity and the Christian era, the two epochs forming complementary parts of a single providential plan for humanities salvation. （略）His admiration for classical culture and society was profound, （略）but they were imperfect, as their creators remained untouched by divine grace[32]”

4.2. ドイツ

4.2.1. J. W. ゲーテ（1749 年 8 月 28 日－1832 年 3 月 22 日）

ゲーテは様々な影響を受けていたが、その中で最も重要なのは、間違いなく西洋古典文学の影響であろう。ラテン語と古代ギリシャ語を理解できた彼は、特にホメーロスと悲劇作者を愛読していた。研究者によれば、『ファウスト』というゲーテの最高傑作で登場する、トロイアのヘレネーという人物は、ゲーテ自身の古代ギリシャ芸術や文芸などへの積極的な態度の擬人化人物である。さらに、ドイツのクラシシズム主義、つまり、古典主義運動の原点のきっかけとなった出来事は、ゲーテのイタリアへの旅行だったという説もある。この旅は一年半にも渡り、イタリア各地を訪れながら、西洋古典に関わる様々な作品を完成形にもたらした。ローマの滞在中は、エウリピデスや、カトゥルス、オウィディウスなどの真似しながら、斬新なモチーフや主題を加え、当時のモラルや人生観を反映するようになった作品を著筆した[33]。

4.3. フランス

4.3.1. A. フランス（1844 年 4 月 16 日－1924 年 10 月 12 日）

ノーベル文学賞を受賞した、フランスの詩人・小説家・批評家である。A. フランスは『仏蘭西文学と僕』という芥川の書籍で、「僕は中学校五年生の時に、（略）アナトオル・フランスの『タイス』という小説を読んだ。何でもその頃早稲田文学の新年号に、安成貞雄君が書いた紹介があったものだから、それを読むと直ぐに丸善へ行って買ってきたという記憶がある。この本は大いに感服した。（今でもフランスの著作中、一番面白いのは何かと問われれば、直ぐに僕は「タイス」と答える）[34]」と、芥川自身に指摘されている。この一箇所によれば、明らかになることが二点ある。一点目は、少年期から、芥川はフランス文学を愛読しながら西洋古典とも接触し、西洋古典のモチーフを触れた作品を特別に好んでいたということである。二点目は、少年期の芥川は、傾倒していたフランスの様々な著作品の中で、最も「面白い」と思っていたのは、A. フランスの『タイス』であったということだ。

A. フランスは 20 世紀初頭に人気を集め、生存中にノーベル賞を受賞したにも関わらず、不思議なことに、第二次世界大戦後は段々忘れられていく著者である。フランス文学の 20 世紀代表的作家の纏め本でも滅多に取り上げられず、教科書にも大抵投稿されていないのである。その原因は幾つも挙げら

れるが、主な理由はフランスの作品内容にあると考えられる。A. フランスの著作品は、西洋古典と当時の政治情勢との関係が余りにも緊密で、現代人の目には読みにくいものとなっている[35]。エルナンデス氏によれば、フランスの西洋古典に関する位置づけが分かるために、次の様に述べている。「A. フランスと西洋古典との関連付けが明白なことである（略）特に初期の作品に、西洋古典というモチーフはこの作家の妄想となっていたと言っても過言ではない。（略）西洋古典を取材し、モチーフにした主な作品は『タイス』（1890年）。この作品は紀元後 4 世紀のアレクサンドリアを舞台とし、反基督教の立場から古代ギリシャの哲学史の賞賛をテーマにする作品である[36]。」上述した様に、芥川の憧れの作家、A. フランスのいずれの著作品でもそうだが、得に『タイス』という作品を理解しようとするなら、必要不可欠の前提条件がある。西洋古典について、とりわけ深い知識を持つことである。また、古代ギリシャの哲学史の纏めを紹介する『タイス』は、芥川が理解していただけでなく、芥川自身が宣言する様に、A. フランスの著作品の中で特にお気に入りの作品であった。

4.3.2. C. P. ボードレール（1821 年 4 月 9 日－1867 年 8 月 31 日）

19 世紀の詩人、評論家、フランス出身の「近代詩の父」とも称されるボードレールは、西洋古典に対する活発的な反対運動を行っていた作家である。芥川に深い印象を残した、「近代性」について論じたボードレールの代表的な作品、『悪の華』でも、西洋伝統への反対運動が題目から見てとれるのである。つまり、今まで見てきた作家と違い、西洋古典への感嘆より、反感を感じたのである。西洋古典の気質の底にある「美」＝「良」、「醜」＝「悪」という同等意識は、ボードレールの著作品では逆転され、「美」に満ちた華にでも、「悪」というものも存在する可能性があるため、「悪」そのものも詩人から賛美すべきものであるという意味のある題目である[37]。換言すれば、西洋の精神的な基礎となった同等意識を、否定しながら崩壊し、「近代性」という新しい基礎が必要となり、作り上げていく。そのため、斬新な同等意識を定着させるのである。

4.4. 英語圏

4.4.1. S. バトラー（1835 年 12 月 4 日－1902 年 6 月 18 日）

芥川に頻繁に引用されている、19 世紀後半に活躍していたイギリスの作家

バトラーは、「バトラーは西洋古典との緊密な関係があった[38]」と、エルナンデス氏に指摘されている。バトラーは、西洋文学最初期のホメーロスの二つの作品、『イリアス』と『オデュッセイア』の散文英訳を出版しただけでなく、当時流行していた、ホメーロスは実在したのか、あるいは作り上げられた人物だったのかという問題についても随筆を書いている。彼の出した結論は、「『イリアス』と『オデュッセイア』という二つの作品は女性に著作されたものだ」というもので、多くの騒ぎを引き起こしたのである。バトラーの、ホメーロスについての二つの随筆は、芥川の洋書文庫で取り上げられている。

4.4.2. G. B. ショー（1856 年 7 月 26 日－1950 年 11 月 2 日）

ノーベル文学賞を受賞したアイルランドの作家、文学者、評論家、ジャーナリストとして活躍していたショーは、英語圏の国々に所属している作家の中で、芥川の作品中で最も引用されている。「イギリス近代演劇の確立者として」見做されているショーは、西洋古典のモチーフを利用し、『シーザーとクレオパトラ』（1898 年）や『アンドロクリーズとライオン』（1912 年）など、様々な作品を著作したのである。更に、ショーの最も知られている作品は、1913 年に発表された、ギリシャ神話に登場するキプロス島の王、ピグマリオンを主人公にする同称の『ピグマリオン』であり、西洋古典のモチーフを中心に描かれている。この作品は、数年後 A. J. ラーナーにより、『マイ・フェア・レディ』という名でミュージカル化され大ヒットし、現在に及んで大きな影響を与えたものに間違いない。

4.4.3. W. シェイクスピア（1564 年 4 月 26 日（洗礼日）－1616 年 4 月 23 日）

イギリスの劇作家、詩人であり、英文学を代表する人物でもあった。彼の作品は、近代英語の重要な言語学的資料となっており、作中に登場する主人公の心理描写が優れている作家として知られている。シェイクスピアは若い頃に、例え「イギリス・ルネサンスの典型的な教養を身につけ、オウィディウスの『祭暦』を愛読していた記録が未だに残っている」[39] とはいえ、「実際は彼のラテン語力とギリシャ語力が割りと乏しかった」[40] のだそうだ。しかし、一見シェイクスピアの西洋古典への関心が薄く思えるのだが、彼の著作品の内容の観点から分析してみると次の様である。「古代ローマのモチーフを採用する作品が 6 作、古代ギリシャのモチーフを採用する作品 6 作」[41] が存在していると、エルナンデス氏に指摘されている。まして、古代ギリシャ・ローマのモチーフに触れない作中でも、シェイクスピアは、「注意深く呼んだセ

ネカの書き方を真似した相違がなく、古代ローマの喜劇作家プラウトゥスと帝政ローマ時代のギリシア人著述家、プルタルコスの影響を受けたのも明らかである」[42] とのことである。

5. 結びに

今まで紹介してきた様に、芥川龍之介に最も影響を与えた西洋の著者は、西洋古典との繋がりが大変緊密であった。西洋古典への高い程度の心得がなければ、彼らの作品を理解出来るはずもなく、作品を読んで楽しめるはずもなかったと考えられる。まして、西洋古典時代を作品の舞台とする、フランス、バトラー、ボードレールとダンヌンツィオの場合はその知識がなおさら必要だと言っても良かろう。現時点では、芥川の、西洋古典というモチーフを扱う著作物を簡潔に取り上げる前に、芥川と芥川を取り囲んだ、当時の西洋古典状況という問題に対し、二点ほど考察したい。

1. 先ず、芥川が言及や引用する西洋古典の文人の名が、明治期から昭和初期にかけて重訳された、西洋古典の文人と一致するのか、という問いが生じてくるであろう。「芥川の洋書文庫」と「西洋古典文学の明治時代からの移入状況」という資料に従い、以下の設問に対する回答は肯定的なものである。一致する名を取り上げれば、エウリピデス、ホメーロス、オウィディウス、ペトロニウス、ソポクレス、プラトン、サッポー、アイソーポス、アリストテレス、アプレイウス、アナクレオン、テオクリトスとセネカ、と、割に出る名が数多いのである。むろん、明治期と大正期にはまだ翻訳されていなかった、エピクロスやエンペドクレス、アキレウス・タティウスなどの文人の名も、芥川の作中で見ることが出来るが、これらは 18 世紀と 19 世紀の芥川が接触していた西洋作家の影響、即ち、間テクスト性により説明出来る。

2. 第二の点は、芥川が採用する西洋古典の文人の名が、明治期から昭和初期にかけての日本の知的エリート達が採用する西洋古典の文人の名と一致するのか、という問いに関しての設問である。この場合でも、回答は肯定的なものである。日本の知的エリート達が扱う西洋古典の文人は、当時の重訳や紹介された文人と一致し、芥川は芥川で彼らと同様の西洋古典の文人を扱っていることが分かる。

上述した様に、この二点により、いかなる芥川と西洋古典というテーマに対しても、芥川の周囲の状況がどこまで重要だったのかを、厳密に二つの立

脚点から考察せずにはいられなくなるはずである。外国と国交を開始してから、西洋文学が日本へなだれ込み、山のように積み重なったため、知的エリート人に吸収されるまでに時間が必要であった。その過程が進歩するにつれ、西洋古典というものの形が取り始められ、殊に明治30年代から、様々な日本人研究者の注目の的になっていくのである。芥川龍之介は、まさしく日本で西洋古典開発過程が起こっている途中に位置づけることが出来、そこから影響を受けたのだとすれば、そこまで奇妙なことでもない。また、芥川が『鼻』をきっかけに加入した文壇の性質には、一つの立脚点がある。文壇に関する芥川自身の言葉を借りれば、「僕の読んだような小説が、文壇一般にも読まれている（略）と云っても良い訳である。すると、僕の読んだ小説の事を話すのは、広い文壇にも大いに関係があるのだから、莫迦にして聞いたり何かしてはいけない。（略）この点でも日本のパルナスは鷗外先生の小説通り、永久に真面目な葬列だった」[43] ということである。つまり、メンバーを厳しく限定する、文壇という集団の中で読まれていた海外作家の大半は、彼らの作品に関する意見が異なっていたにも関わらず、原則として均質性が立てられ、定着していたのである。結局のところ、明治期から昭和期にかけ、資料1で紹介したように、当時の文芸著作者、ほぼ全員が西洋古典の同様の文人を採用するのは、元よりただの原因関係もなく起こることだけではあるまい。

それを、事実として意識した芥川が、文芸にたずさわろうとする上で、来たるべき時代において西洋文学の中から新しい文化が勃興するであろうが、その西洋文学の基礎を固めるもの、即ち、西洋古典の魅力も早速感じとっていたというわけだ。芥川にとって、西洋古典というモチーフは、基督教のモチーフのように、西洋の一面として真似しながら、尊重したものであると言っても良かろう。

注

[1] イヴ・シュヴレル（2001年）『比較文学』東京：平河工業社 p.16

[2] P. Valery (1995) *Europa, la Vía Romana,* Madrid: Gredos p.133

[3] F. Cerruti, F. and E. Rudolph (2001) *A Soul for Europe. On the Political and Cultural Identity of the Europeans,* Leuven: Peeters p.147 "1989 has made it clear that the East Europeans who do not want to be seen as newcomers demanding entrance but rather as family members returning home, have indeed a natural claim to be European. They legitimized this claim by way of their collective cultural heritage and not only by way of

agreements that they have entered into with European Union."

[4] O.Salgado (2008) *Aproximación filosófica al ethos europeo,* Madrid: CEU Ediciones, p.162-169

[5] O.Salgado (2008) Aproximación filosófica al ethos europeo, Madrid: CEU Ediciones, p.170

[6] B. Rémi (1995) *Europa, la vía romana,* Madrid: Gredos, p.43

[7] B. Rémi (1995) *Europa, la vía romana,* Madrid: Gredos, p.46

[8] S. Settis (2006) *El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores, p.59-64

[9] 芥川龍之介（2004）「或旧友へ送る手記」〈http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card20.html〉2015年10月22日アクセス

[10] A. Bernabé (2006) *Fragmentos presocráticos: de Tales a Demócrito,* Madrid: Alianza Editorial（Clásicos de Grecia y Roma）p.181-210

[11] 本論ではソクラテス以前には哲学という概念が存在したかどうかという議論に入る余地がないため、以降ドイツ語の用語を用いる。

[12] A. Bernabé (2006) *Fragmentos presocráticos: de Tales a Demócrito*, Madrid: Alianza Editorial（Clásicos de Grecia y Roma）p.206-224

[13] S. Settis (2006) *El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores, p.99

[14] S. Settis (1986) "Continuità, distanza, conoscenza. Tre usi dell'antico" *Memoria dell'antico nell'arte italiana, III. Dalla tradizione all'archeologia,* Torino p.373-486

[15] S. Settis (2003) "Roma, eternità delle rovine" *Eutropia, n3,* Torino p.133-143

[16] S. Settis (2006) *El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores, p.98-99

[17] S. Settis (2006) *El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores, p.100

[18] O.Salgado (2008) *Aproximación filosófica al ethos europeo,* Madrid: CEU Ediciones, p.164

[19] S. Settis (2006) *El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores, p.100

[20] S. Settis (2006) *El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores, p.100

[21] S. Settis (2006) *El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores, p.99

[22] S. Settis (2003) "Roma, eternità delle rovine" *Eutropia, n3,* Torino p.133-143

[23] この一章を作成するため、ことに参考になった文献は小田切進編（1977-1978）『日本近代文学大事典』4巻日本近代文学館、東京：講談社

[24] 芥川龍之介（2004）「神神の微笑」〈http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/68_15177.html〉2015年11月13日アクセス

[25] S. Settis (2003) *"Roma, eternità delle rovine"* Eutropia, n3, Torino p.133-143

[26] S. Settis (2006) *El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores, p.9-17

[27] C. Kallendorf (2010) *A companion to the Classical Tradition,* Oxford: Blackwell Publishing, p.402

[28] 宮坂覚編（1994）『芥川龍之介全集総索引』東京：岩波書店

[29] 稲垣達郎（1977）『芥川龍之介文庫目録－日本近代文学館所蔵資料目録 2』東京：日本近代文学館

[30] 稲垣達郎（1977）『芥川龍之介文庫目録－日本近代文学館所蔵資料目録 2』東京：日本近代文学館 p.2

[31] L. A. Hernández (2008) *La Tradición Clásica. La transmisión de las literaturas griega y latina y su recepción en las vernáculas occidentales,* Madrid: Liceus, p.342-344

[32] Grafton, Most, Settis (2013) *The Classical Tradition,* Harvard: Harvard University Press p.250-252

[33] L. A. Hernández (2008) *La Tradición Clásica. La transmisión de las literaturas griega y latina y su recepción en las vernáculas occidentales*, Madrid: Liceus, p. 266-269

[34] 芥川龍之介（1989）「仏蘭西文学と僕」『芥川龍之介全集 7 巻』東京：筑摩書房 p.48

[35] J. del Prado (2010) *Historia de la Literatura Francesa,* Madrid: Cátedra, p.845-852

[36] L. A. Hernández (2008) *La Tradición Clásica. La transmisión de las literaturas griega y latina y su recepción en las vernáculas occidentales,* Madrid: Liceus, p.332

[37] L. A. Hernández (2008) *La Tradición Clásica. La transmisión de las literaturas griega y latina y su recepción en las vernáculas occidentales,* Madrid: Liceus, p.327-328

[38] L. A. Hernández (2008) *La Tradición Clásica. La transmisión de las literaturas griega y latina y su recepción en las vernáculas occidentales,* Madrid: Liceus, p.357

[39] Grafton, Most, Settis (2013) *The Classical Tradition,* Harvard: Harvard University Press p.882

[40] Grafton, Most, Settis (2013) *The Classical Tradition,* Harvard: Harvard University Press p.883

[41] L. A. Hernández (2008) *La Tradición Clásica. La transmisión de las literaturas griega y latina y su recepción en las vernáculas occidentales,* Madrid: Liceus, p.207

[42] L. A. Hernández (2008) *La Tradición Clásica. La transmisión de las literaturas griega y latina y su recepción en las vernáculas occidentales,* Madrid: Liceus, p.208

[43] 芥川龍之介（1989）「仏蘭西文学と僕」『芥川龍之介全集 7 巻』東京：筑摩書房 p.50-52

参考文献

イヴ・シュヴレル（2001 年）『比較文学』東京：平河工業社

稲垣達郎（1977）『芥川龍之介文庫目録－日本近代文学館所蔵資料目録 2』東京：日本近代文学館

芥川龍之介（1989）「仏蘭西文学と僕」『芥川龍之介全集 7 巻』東京：筑摩書房

宮坂覚編（1994）『芥川龍之介全集総索引』東京：岩波書店

小田切進編（1977-1978）『日本近代文学大事典』4 巻日本近代文学館、東京：講談社

中村信一郎（1956）『芥川龍之介の世界』東京：青木書店

岩波書店編集部編（1981）『岩波西洋人名辞典』東京：岩波書店

芥川龍之介（2004）「或旧友へ送る手記」〈http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card20.html〉2015 年 10 月 22 日アクセス

芥川龍之介（2004）「神神の微笑」〈http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/68_15177.html〉2015 年 11 月 13 日アクセス

A. Bernabé（2006）*Fragmentos presocráticos: de Tales a Demócrito,* Madrid: Alianza Editorial（Clásicos de Grecia y Roma）

B. Rémi（1995）*Europa, la vía romana,* Madrid: Gredos

C. Kallendorf（2010）*A companion to the Classical Tradition,* Oxford: Blackwell Publishing

F. Cerruti, F. and E. Rudolph（2001）*A Soul for Europe. On the Political and Cultural Identity of the Europeans,* Leuven: Peeters

Grafton, Most, Settis（2013）*The Classical Tradition,* Harvard: Harvard University Press

J. del Prado（2010）*Historia de la Literatura Francesa,* Madrid: Cátedra

L. A. Hernández（2008）*La Tradición Clásica. La transmisión de las literaturas griega y latina y su recepción en las vernáculas occidentales,* Madrid: Liceus

O. Salgado（2008）*Aproximación filosófica al ethos europeo,* Madrid: CEU Ediciones

P. Valery（1995）Europa, la Vía Romana, Madrid: Gredos

S. Settis（1986）“Continuitá, distanza, conoscenza. Tre usi dell’antico” *Memoria dell’antico nell’arte italiana, III. Dalla tradizione alSl’archeologia,* Torino

S. Settis（2003）“Roma, eternitá delle rovine” *Eutropia,* n3, Torino

S. Settis（2006）*El futuro de lo Clásico,* Madrid: Abada Editores

西洋古典文学の明治時代からの移入状況（主要な作者及び作品）（資料１）

時代	分野	作者及び作品
明治以前	初歩的なギリシャ・ローマの哲学者や文学の紹介が存在した。	
明治	総合研究	（歴史）グッドリッチ『巴来万国史』（Parley's Common School History of the World）（1877 年）
		（歴史）菊池大麗『修辞及華文』（1879 年）
		（文学史）渉江保『希臘羅馬文学史』（1893 年）
		（宗教）久米邦武『神話は祭天の古俗』（1891 年）
		（宗教）高木敏雄『比較神話学』（1904 年）
	翻訳	（重訳）ソポクレース、テオクリトス、ホラーティウス、アナクレオーん、アープレーユス
	寓話	（アイソーポス）渡辺温『通俗伊蘇普物語』（1873 年）
	悲喜劇	芳賀矢一『希臘悲劇と我邦の能楽』（1904 年）
		坪内逍遥『希臘古代の演劇』（1907 年）
	韻文―情詩	木村鷹太郎『快楽詩人アナクレオン』（1902 年）
	韻文―叙事詩	鳥山啓『西洋ホメル詩学鼻祖』（1873 年）
		石坂洋次郎『オデッセイ物語』（1903 年）
		正宗白鳥『イリアッド物語』（1902 年）
	散文	戸沢正保『愛と心』（1902 年）（アープレーユス）
	ギリシャ・ローマの文人を引用する作者	高田半峰『維氏美学』（1883 年）（プラトーン、アリストテレース、ピュタゴラス、ホメーロス、ヴィルギリウスが引用される）
		高田半峰『当世書生気質の批評』（1886 年）（ホメーロスとヴィルギリウスの引用される）
		大西祝『批評論』（1888 年）（ギリシャ・ローマの様々な文人が重要な役割を果たしている）
		島崎藤村『桜の実の熟する時』（1890 年）（『希臘道徳より基督教道徳に入る』という講座が引用される）
		後藤宙外と相馬黒光の作品にプラトニック・ラヴという概念が登場する
		石橋忍月、山田美妙、国木田独歩、北村秀谷、高山樗牛、姉崎嘲風、竹越三叉、森鷗外、岩野泡鳴、中沢臨川、長谷川天渓、生田長江等の作品中に古代ギリシャ・ローマ文人を採用する
大正	総合研究	（宗教）木村鷹太郎『希臘羅馬神話』（1926 年）
		（哲学）深田康算『アリストテレースの芸術』（1920 年）
		（哲学）深田康算『プラトーの美学』（1920 年）
		（哲学）松浦嘉一『詩学』（1924 年）（アリストテレース）
	翻訳	（重訳）アイスキュロス、アリストパネース、エウリーピデース、アープレーユス、セネカ
	悲喜劇	藤代素人『能楽と洋劇』（1914 年）
		新関良三『ギリシャ悲劇論』1（1925 年）
	韻文―情詩	尾関岩二『サッフォ名詩選』（1923 年）
		尾関岩二『恋愛詩集』（1924 年）
	韻文―叙事詩	（重訳）生田長江『イリアッド』（1914 年）
		姉崎嘲風『世界文明の新紀元』（1919 年）（ヴェルギリウス）
	散文	高橋五郎『セネカ論説集』（1913 年）
		柳田泉『神託』（1925 年）（ヘーロドトス）
	ギリシャ・ローマの文人を引用する作者	倉田百三は希臘主義と基督教主義の調和を求める（1925 年）

芥川の作品に於ける西洋の作家からの西洋古典の影響（資料 2）

イタリア	☆ Gabriele D'Annunzio（ガブリエーレ・ダンヌンツィオ）1863 年 3 月 12 日－ 1938 年 3 月 1 日 『The child of pleasure』tr. from the Italian by Georgina Harding, the verses tr. and an intro. by Arthur Symons. Boston, Page, 1910 『The daughter of Jorio; a pastoral tragedy』tr. from the Italian by Charlotte Porter, Pietro Isola and Alice Henly. Boston, Little, 1907 『The dead city』a tragedy rendered into English by G. Mantellini. Chicago, Laird, 1902. 『The flame of life』tr. from the Italian by Kassandra Vivaria. London, Heinemann, 1900. 『Francesca da Rimini』a play in five acts, tr. from the Italian by Arthur Symons. London, Heinemann, 1903. 『Die Gioconda』eine Tragödie, Deutsch von Linda von Lützow. 10. Aufl. Berlin, Fischer, 1909. 『The maidens of the rocks』tr. from the Italian by Annetta Halliday-Antona and Giuseppe Antona. Boston, Page, 1906. 『The victim』tr. from the Italian by Georgina Harding. London, Heinemann, 1899. (Heinemann's colonial library of popular fiction) 引用頻度 10 回・引用名称：ダンヌンツィオ、ダンヌンチョ、ダンヌンチオ、ダンヌンツイオ、D'ANNUNCIO, D'annunzio
	☆ Dante Alighieri（ダンテ・アリギエーリ）1265 年－ 1321 年 9 月 14 日 『The visión; Hell, Purgatory and Paradise』tr. by Henry Francis Cary. The Albion, ed. London, Warne, 1844. 引用頻度 11 回・引用名称：ダンテ
	Giovanni Boccaccio（ジョヴァンニ・ボッカッチョ）1313 年？月？日 - 1375 年 12 月 21 日 『The decameron』London, Gibbings, 1911. 4 vols. 引用頻度 0 回・引用名称：0
	Giorgio Vasari（ジョルジョ・ヴァザーリ）1511 年 7 月 30 日－ 1574 年 6 月 27 日 引用頻度 0 回・引用名称：0
ドイツ	Hugo von Hofmannsthal（オ）（フーゴ・フォン・ホーフマンスタール）1874 年 2 月 1 日－ 1929 年 7 月 15 日 『Elektra, Tragödie in einem Aufzug.』Aufl. Berlin, Fischer, 1906. 引用頻度 0 回・引用名称：0
	Ferdinand Schmidt（フェルディナンド・シュミット）1816 年 10 月 2 日－ 1890 年 7 月 30 日 『Homers Odyssee』erzählt von Ferdinand Schmidt. 13. Aufl. Einbeck, Oehmigkes, [n.d.] 引用頻度 0 回・引用名称：0
	☆ Johann Wolfgang von Goethe（ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ）1749 年 8 月 28 日－ 1832 年 3 月 22 日 『Criticisms, reflections and maxims with an intro.』London, Walter Scott, [n.d.] 『Goethe's literary essays』a sel. in English arr. by J.E. Spingarn, with a foreword by Viscount Haldane. New York, Harcourt, 1921. 『Novels and tales』tr. from the German by James Anthony Froude and R. Dillon Boylan. London, Bell, 1911. 『Poetry and truth from my own life』a rev. tr. by Minna Steele Smith with an into. and bibliography by Karl Breul. London, Bell, 1913. 引用頻度 52 回・引用名称：ゲエテ、ゲーテ、ギョオテ、Goethe
	Wilhelm Max Wundt（ヴィルヘルム・ヴント）1832 年 8 月 16 日－ 1920 年 8 月 31 日 『Griechische Weltanschauung』Leipzig, Teubner, 1910.（Aus Natur und Geisteswelt） 引用頻度 0 回・引用名称：0
フランス	Denis Diderot（ドゥニ・ディドロ）1713 年 10 月 5 日－ 1784 年 7 月 31 日 引用頻度 0 回・引用名称：0
	Paul Bourget（ポール・ブーゲット）1852 年 9 月 2 日－ 1935 年 12 月 25 日 『Antigone and other portraits of women（voyagueuses）』tr. by William Marchant. New York, Scribner, 1898. 引用頻度 0 回・引用名称：0

フランス	☆ Anatole France（アナトール・フランス）1844年4月16日－1924年10月12日 『Balthasar』tr. by Mrs. John Lane. London, Lane, 1909. 『The bridge of Corinth and other poems and plays』tr. by Wilfrid Jackson & Emile Jackson. London, Lane, 1920. 『Clio』tr. by Winifred Stephens. London, Lane, 1922. 『The garden of Epicurus』tr. by Alfred Allison. London, Lane, 1908. 『The gods are athirst』tr. by Mrs. Wilfrid Jackson. London, Lane, 1921. 『Jocasta & the famished cat』tr. by Agnes Farley. London, Lane, 1912. 『The Latin genius』tr. by Wilfrid S. Jackson. London, Lane, 1924. 『Thaïs』tr. by Robert B. Douglas. London, Lane, 1909. 引用頻度40回・引用名称：アナトル・フランス、アナトール・フランス、フランス、Anatole France、ANATOLE FRANCE
	☆ Gustave Flaubert（ギュスターヴ・フローベール）1821年12月12日－1880年5月8日 『Madame Bovary』tr. from the French with critical intro. by Henry James. London, Heinemann, 1902.（A century of French romance） 『Salammbo』tr. by J. W. Matthews, with an intro by Arthur Symons. London, Richards, 1901.（French novels on the nineteenth century, 1） 『The temptation of St. Anthony』tr. by Lafcadio Hearn. New York, Harriman, 1911. 引用頻度20回・引用名称：フロベル、フローベール、フローベル、フロオベル、Flaubert
	Théophile Gautier（テオフィル・ゴーティエ）1811年8月30日－1872年10月23日 『Romances（vol. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 10）』tr. and ed. with an intro. by F. C. de Sumichrast. Boston, Little, 1912. 引用頻度7回・引用名称：テオフィル・ゴオテイエ、ゴーチュ、ゴオチェ
	Pierre Louys（ピエール・ルイス）1870年12月10日－1925年6月6日 『Aphrodite; a novel of Ancient manners, complete and integral tr. into English』Paris, Carrington, 1906. 引用頻度2回・引用名称：ルイズ
	☆ Charles Pierre Baudelaire（シャルル・ピエール・ボードレール）1821年4月9日－1867年8月31日 『Baudelaire; his prose and poetry』ed. by T. R. Smith. New York, Boni and Liveright, c1919（The Modern Library） 『The flowers of evil 』tr. into English verse by Cyril Scott. London, Mathews, 1909. 引用頻度35回・引用名称：ボオドレエル、ボードレール、ヴォードレール、ヴォドレル、Baudelaire、Charles Baudeaire、C. Baudelaire
英国	Charles Dickens（チャールズ・ディケンズ）1812年2月7日－1870年6月9日 引用頻度8回・引用名称：デイケンズ、デイッケンズ、デイツケンス、チャアレス・ディツケンス、ヂケンス、Charles Dikens、Dikens
	Geoffrey Chaucer（ジェフリー・チョーサー）1343年頃－1400年10月25日 『The knight's tale or Palamon and Arcite』done into modern English by Walter W. Skeat. London, Moring, 1904.（The King's classics） 引用頻度2回・引用名称：チョオサア、チョーサア
	Arthur Conan Doyle（アーサー・コナン・ドイル）1859年5月22日－1930年7月7日 引用頻度0回・引用名称0
	Lord Dunsany（ロード・ダンセイニ）1878年7月24日－1957年10月25日 『Fifty-one tales』London, Mathews, 1915. 『Five plays; The gods of the mountain.-The golden doom.-King Argimenes and the unknown warrior.-The glittering gate.-The lost silk hat』New York, Kennerley, 1914. 引用頻度0回・引用名称0
	☆ Samuel Butler（サミュエル・バトラー）1835年12月4日－1902年6月18日 『The humor of Homer and other essays』ed. by R. A. Streatfield, 1913. 『The Authoress of the Odyssey』1897 引用頻度11回・引用名称：バトラア、バットラア、サミュエル・バットラア、サムエル・バトラア、Samuel Butler、Butler

英国	George Gordon Byron（Lord Byron）（ジョージ・ゴードン・バイロン）1788 年 1 月 22 日－1824 年 4 月 19 日 『Poetical works』London, Oxford Univ., 1910. 引用頻度 5 回・引用名称：バイロン、Byron
	Charles Kingsley（チャールズ・キングスレー）1819 年 6 月 12 日－1875 年 1 月 23 日 『Hypatia or New foes with an old face』London, Dent, 1910.（Everyman's library） 引用頻度 0 回・引用名称：0
	Walter Savage Landor（ウォールター・ランドール）1775 年 1 月 30 日－1864 年 9 月 17 日 『Works. Classical dialogues』London, Routledge.（The new universal library） 引用頻度 1 回・引用名称：ランドール
	Walter Pater（ウォルター・ペイター）1839 年 8 月 4 日－1894 年 7 月 30 日 『Greek studies; a series of essays』2nd. ed. London, Macmillan, 1914. 『Miscellaneous studies; a series of essays』2nd. ed. London, Macmillan, 1909. 『The Renaissance; studies in art and poetry』5th. ed. London, Macmillan, 1912. 引用頻度 4 回・引用名称：パエタア、Pater, Walter Pater
	☆ George Bernard Shaw（ジョージ・バーナード・ショー）1856 年 7 月 26 日－1950 年 11 月 2 日 『Androcles and the lion; a fable play』London, Constable, 1920. 『Pygmalion; a romance in five acts』London, Constable, 1920. 引用頻度 32 回・引用名称：ショオ、バアナアド・ショウ、バアナアド・ショオ、バアナード・ショオ、ショウ、笑迂、Bernard Shaw, SHAW, Shaw
	Mary Shelley（メアリー・シェリー）1797 年 8 月 30 日－1851 年 2 月 1 日 『Frankenstein or the modern Prometheus』London, Dent,［n.d.］ 引用頻度 4 回・引用名称：シェリイ、Shelley、メリイ・シェリイ
	☆ William Shakespeare（ウィリアム・シェイクスピア）1564 年 4 月 26 日－1616 年 4 月 23 日 『Antony and Cleopatra, with an intro. and notes by K. Deighton』London, Macmillan, 1907. 引用頻度 27 回・引用名称：シェークスピア、シェエクスピア、シェクスピア、シェクスピイア、セークスピア、ウイリアム・セキスピア、沙翁、Shakespeare
	Grant Showeman（ア）（グラント・シャワーマン）1870 年 1 月 9 日－1935 年 11 月 13 日 『Horace and its influence』Boston, Jones, 1922（Our debt to Greece and Rome） 引用頻度 0 回・引用名称：0
古代ギリシャ・ローマ	Euripides（エウリピデス）紀元前 480 年頃－紀元前 406 年頃 『Electra』tr. into English rhyming verse with explanatory notes by Gilbert Murray. London, Allen, 1914. 『Iphigenia in Tauris』tr. into English rhyming verse with explanatory notes by Gilbert Murray. London, Allen, 1913. 『Medea』tr. into English rhyming verse with explanatory notes by Gilbert Murray. London, Allen, 1913. 『Trojan women』tr. into English rhyming verse with explanatory notes by Gilbert Murray. London, Allen, 1914. 引用頻度 0 回・引用名称：0
	Heliodorus of Emesa（エメサのヘリオドロス）西暦 3 世紀頃 『The Greek romances of Heliodorus, Longus and Achilles Tatius』tr. from the Greek with notes by Rowland Smith. London, Bell, 1912. 引用頻度 0 回・引用名称：0
	Longus（ロンゴス）西暦 2 世紀頃 『The Greek romances of Heliodorus, Longus and Achilles Tatius』tr. from the Greek with notes by Rowland Smith. London, Bell, 1912. 引用頻度 0 回・引用名称：0
	Achilles Tatius（アキレウス・タティウス）西暦 2 世紀頃 『The Greek romances of Heliodorus, Longus and Achilles Tatius』tr. from the Greek with notes by Rowland Smith. London, Bell, 1912. 引用頻度 0 回・引用名称：0

古代ギリシャ・ローマ	Herodotus（ヘロドトス）紀元前485年頃－紀元前420年頃 『Stories from Herodotus』retold by H. L. Havell. London, Harrap, 1919. 引用頻度0回・引用名称：0
	☆ Homerus（ホメーロス）紀元前8世紀末 『Odyssey』done into English prose by S. H. Butcher and A. Lang. London, Macmillan, 1919. 引用頻度3回・引用名称：ホメロス、ホメエロス、Homer
	Publius Ovidius Naso（プブリウス・オウィディウス・ナソ）紀元前43年3月20日－西暦17年 『The fasti, tristia, pontic epistles, ibis and the halieuticon』literally tr. into English prose by Henry T. Riley. London, Bell, 1915.（Bohn's libraries） 『The metamorphoses』literally tr. into English prose by Henry T. Riley. London, Bell, 1915.（Bohn's libraries） 『Heroides, amours; art of love, remedy of love and minor works』literally tr. into English prose by Henry T. Riley. London, Bell, 1915.（Bohn's libraries） 引用頻度0回・引用名称：0
	Petronius（ペトロニウス西暦20年頃－西暦66年 『Trimalchio's banquet』London, Walter Scott, ［n.d.］ 引用頻度0回・引用名称：0
	Sophokles（ソポクレス）紀元前496年頃－紀元前406年頃 『Oedipus, King of Thepes』tr. into English verse with explanatory notes by Gilbert Murray. London, Allen, 1912 引用頻度0回・引用名称：0

『芥川龍之介文庫目録』で引用されていない古代著作家

Demosthenes（デモステネス）引用頻度1回・引用名称：デモステネス

☆ Plato（プラトン）引用頻度9回・引用名称：プラトン、プラトー、プラトウン、プラトオ、Plato

Epicuros（エピクロス）引用頻度1回・引用名称：エピクロス

Empedocles（エンペドクレス）引用頻度1回・引用名称：エンペドクレス

Socrates（ソクラテス）引用頻度4回・引用名称：ソクラテス

Diogenes Laertius（ディオゲネス・ラエルティオス）引用頻度1回・引用名称：ディオゲネス

Sappho（サッポー）引用頻度2回・引用名称：サッフォ

☆ Aesop（アイソーポス）引用頻度5回・引用名称：えそぽ

Aristoteles（アリストテレス）引用頻度1回・引用名称：アリストテレス

☆ Apuleius（アプレイウス）引用頻度3回・引用名称：アプレイウス、アプレリウス

Anacreon（アナクレオン）引用頻度1回・引用名称：アナクレオン

Apollonios Rhodios（ロドスのアポローニオス）引用頻度1回・引用名称：アポロニウス

Theocritos（テオクリトス）引用頻度1回・引用名称：セオクリタス

Marcus Annaeus Seneca（マルクス・アンナエウス・セネカ）引用頻度1回・引用名称：セネカ